

夏目漱石

中味と形式

中味と形式

私はこの地方にいるものではありません、東京の方に平生住^{すま}っております。今度大阪の社のほうで講演会を諸所で開きますについて、助勢をしろという命令——だか通知だか依頼だかとにかく催しに参加しなければならぬというような相談を受けました。それでわざわざ出てまいりました。もつともこの堺^{さかい}だけでお話をししてすぐ東京^{おもて}表へ立ち帰るといふわけでもないのです、現に明石^{あかし}の方へ行きましたり、和歌山の方へ参りましたり、明日はまた大

阪でやる手順になっております。むろん話すことさえあれば、どこへ行ってなにをやっても差さ支しないはずですが、暑中の際そうく身体からだも続きませぬから、好い加減かげんのところところで断りたいと思っております。しかしこの堺は当初からの約束でぜひなにか講話をすべきはずになっておりましたから私のほうもそれは覚悟のうえで参りました。したがってしっかりしたお話らしいお話をしなればならないわけでありますが、どうもそう旨うまくゆかないからはなはだお気の毒です。たゞいまは高原君が樺太旅からふと行談ついたり海豹島かいひようとうなどの話をされましたが実地の見

聞談でまことに有益でもあり、かつ面白く聴いておりました。私のは諸君に興味または利益を与えるという点において、とても高原君ほどに参りませぬ。高原君は御覽のとおりフロックコートを着ておりましたが、私はこのとおりで背広せびろで御免蒙こうむるようなわけで、お話の面白さもまたこの服装の相違くらい懸隔しているかもしれませぬから、まずその辺のところと申しんって辛抱ぼうしてお聴きを願います。高原君はしきりに聴衆諸君に向むかって厭いやになつたら遠慮なく途中でお帰りなさいといわれたようですが私は厭になつてもぜひ聴いていたゞきたいので、その

代り高原君ほど長くは遣りませぬ。この暑いのにそう長く遣つてはなんだか脳貧血でも起しそうで危険ですからできるだけ縮めてさつさと片付けますから、そのあいだは帰らずに、暑くても我慢をして、終つた時に拍手喝采をして、そうしてめでたく閉会をしてください。

私は先年堺へ来たことがあります。これはよほど前私
がまだ書生時代のことで、明治二十何年になりますか、
なんでもよほど久しいことのように記憶しております。
実をいうと今登つた高原君、あれは私が高等学校で教え
ていた時分のお弟子であります。あゝいう立派なお弟子

を持っていくくらいでありますから、私もよほど年を取りました。その私がまだ若い時のことですからまあ昔といつでも宜^{よろ}しゅうございましょう。今考えるとほとんどその時に見た堺の記憶というものはありませんが、なんでも妙国寺というお寺へ行って蘇^そ鉄^{てつ}を探したように覚えております。それからそのお寺の傍^{かたわら}に小刀や庖丁を売る店があつて記念のためちよつとした刃物をそこで求めたようにも覚えています。それから海岸へ行ったら大きな料理店があつたようにも記憶しています。その料理店の名はたしか一力^{いちりき}とかいいました。すべてがぼんやりし

て思い出すとまるで夢のようであります。その夢のよう
な堺へ今日はからずも来て再び昔の町を車に揺られなが
ら通ってみると非常に広いような心持がする。停車場か
らこの会場までの道程みちのりもだいぶある。こう申しては失礼
であるが昔見た時はごくケチな所であつたかのようにし
か、頭に映じないのであります。それで車の上で感服し
たような驚いたような顔をして、きよろく見回してく
ると所々の辻々つじつじに講演の看板といますか、広告とい
いますか、夏目漱石君などというような名前なまえが墨黒々と書
いて壁に貼はり付っけてある。なんだか雲右衛門かなにかが

興行のため乗り込んだようである。社のほうからいえばあのほうが宣よいのでしようが、夏目漱石氏からいえばあゝ曝さらしものになるのはあまり難ありがた有くない。なお車の上で観察すると往来の幅がはなはだ狭い。がそれは問題ではない、私の妙に感じたのはその細い往来がヒツソリして非常に静かに昼寐ひるねでもしているように見えたことでもあります。もつとも夏の真午まひるだからあまり人が戸外に出る必要のない時間だったのでしよう、私がこゝに着いたのはちょうど十二時少し過すぎでありました。二階へ上あがって長い廊下のはずれに見える会場の入口から中の方を見渡す

と、少し人の頭が黒く見えたくらいで、市内がヒツソリしているごとく聴衆もまたヒツソリしている。これは幸いだ——とは思いません、また困ったとまでも思いません。けれどもまあ不入りだろうと考えながら控ひかえせき席へ入はいって休息していると、いつのまにやらこんなに人が集つてきた。この講堂にかくまで詰め懸かけられた人数の景況から推おすと堺さかいという所は決して吝けちな所ではない、偉えらい所に違ちがいない。市中があればほどヒツソリしているにかゝわらず、時間が来さえすればこれほど多数の聴衆がお集まりになるのは偉い、よほど講演趣味の発達した所だろう

と思われる。私もせつかく東京からわざわざ出て来たものでありますから、なろうことならば講演趣味の最も発達した堺のような所で、一度でも講演をすればまことに心持が好よい。だから諸君もその志を諒りようとして、終しまいまで静肅にお聴きにならないことを希望します。このくらいにしてこゝに張り出した「中味なかみと形式」という題にでも移りますかな。

第一、題からしてあまり面白そうにはみえませぬ。中味は無論詰つまらなそうです。私は学会の演説は時々依頼を受けてやることがあります。こういう公衆、すなわち

種々の職業を有^もつたかたがお集まりになつた席ではあまりお話をした経験がありません。また頼みにもきません。頼まれてもたいていは断ります。と申すのは種々の職業を有つておられるかたぐいのすべてに興味のあるようなことは、私の研究の範囲、あるいは興味^の範囲からしてとても力に及ばないという掛念^{けねん}があるからです。でなるべくは避けておりますが、已^やむを得ず今日のような場合には、できるだけ一般の人に興味のあるために、社会問題^のというようなものを扱^{えら}みます。けれどもその社会の見方^{みかた}とかあるいは人間の観察の仕方とかがまたしぜん私

の今日までやった学問やら研究に煩わされてどうも好き
なほうばかりへ傾き易いのは免かれがたいところであり
ますから、職業のいかん、興味のいかんによつては、ま
ことに面白くない駄弁だべんに始つて下らない饒舌じょうぜつに終るこ
とだろうと思うのです。のみならずこれから遺る中味と
形式という問題が今申したとおりあまり乾燥して光沢つやけ
の乏しいみだしなのでことさら懸念けねんをいたします。が
言訳いいわけはこのくらいでたくさんでしようからそろく先へ
進みましょう。

私は家に子供こどもがたくさんおります。女が五人に男が

二人、^{ふたり}しめて七人、それでいちばん上の子供が十三です
から赤ん坊に至るまでズツと順よく並んでまあ^{ていさい}体裁よく
揃^{そろ}っております。それはどうでも宜しいがかように子供
が多うございますから、時々いろいろの請求を受けます。
跳^はねる馬を買ってくれとか動く電車を買ってくれとか
いろいろ強^ね請^だられるうちに、活動写真へ連れてゆけとい
う注文がおりくく出ます。元来私は活動写真というもの
をあまり好きません。どうも芝^{しばい}居^いの真^ま似^ねなどをしたり変
な^{こわいろ}声色^{こわいろ}を使ったりして厭^{いや}気^けのさすものです。そのうえな
んぞという^{なぐ}と擲^{なぐ}ったり蹴^け飛^{とば}したり惨酷な写真を入れるの

で子供の教育上はなはだ宜しくないからなるべく遣りた
くないのですが、子供のほうではしきりに行きたかがる
ので——もつとも活動写真といったって必ず女が出てき
て妙な科しなをするとは極きまっていかない、なかには馬鹿ばか気げで
滑稽こっけいなものもたくさんありますから子供の見たがるのも無
理ではないかもしれませぬ。で三度に一度は頑固がんこな私も
つい連れ出されることがあります。監督者かんとくといっていますか、
なんといいいますか、まず案内者あるいはお傅もりとでもいう
格かなんでしょう。暑いところへ入はいって鼻の頭へ汗の玉たまを
並べて我慢がまんをして動かずにいることがあります。すると

子供からよく質問を受けて弱るのです。もっとも滑稽物こっけいものやなにかで帽子を飛ばして町内中逐おつかけてゆくといったような仕草しぐさは、たゞそのままの可笑味おかしみで子供だつて見ていさえすれば分りますから質問の出る訳もありませんが、人情物、芝居しばいがかつた続き物になると時々聞かれます。その問ははなはだ簡単でたゞどっちが善人でどっちが悪人かというだけなんです。私からいえばどっちも人間にはなつていない、善人にも悪人にもなつておらない。よしなつていたつて、幼稚にしる筋は子供の頭より込入こみいっているからそう一口に判断を下してやるわけにはゆか

ない。それでどうも迷^ま児^ごつかされることがたびたび出てくるのです。大人^{おとな}からいえば、たゞ見ていて事件の進^{しん}行^{ぎょう}と筋の運び方さえ腑^ふに落ちればそれで済むのですけれども、悲しいかな子供にはそれほど一部始終を呑^のみ込む頭がない。といってたゞ茫然^{ぼうぜん}と幕に映る人物の影がしきりに活動するのを眺^{なが}めているわけにもゆかない。どうかしてこの込み入った画^えの配合や人間の立ち回りを驚^{わしづか}抓^{つか}みに引^ひつくるめてその特色を最も簡明な形式で頭へ入れたいについてはすでに幼稚な頭の中にいくぶんでも髣髴^{ほうふつ}できる倫理上の二大性質——善か悪かを取り極^きめてこの錯^{さく}雑^{ざつ}

した光景を締め括りくくたい希望からこういう質問を掛けるかものと思われまます。活動写真はまだ宣のたまい。ところがお伽とぎ噺ばなしや歴史の本などを見て、昔の英雄などについてやはり同様に簡単な質問を掛けられることがある。太閤様たいこうと正成まさしげとどっちが偉えらいとか、ワシントンとナポレオンとどっちが強いとか、常陸山ひたちやまと弁慶べんけいと相撲すもうを取ったらどっちが勝つとか、なかには返答に困らないのもあるが、多くは挨拶あいさつに窮きつする問題である。要するに複雑な内容を纏まとめ得る程度以上に纏めた簡略な形式にしてみせると逼せまられるのだから困ります。もつとも近来は小学校などでも生

徒に問題を出して日本の現代の人物中で誰だれがいちばん偉いかなどと聞く先生がある。このあいだ私がある地方へ行ったらある新聞でそういう問題を出して小学生徒から答案の投書を募っていました。そのなかで自分のお父とうさんがいちばん偉いという答を寄こしたのがあると聞いてはなはだ面白く感じました。自分の親父おやじが天下一の人物だなどは至極しごく好い見りょうけんで結構です。それは余事であるが、とにかく先生や新聞などからして、日本にたった一人偉い人があって、その人は甲にも乙にも丙にも凌駕りょうがしているから中あててみるというような数学的の問題を出す

世の中だから子供から質問が出るのも無理はない。しかし困ります。楠くすのきまさしげ正とよとみひでよし成と豊臣秀吉とどっちが偉いというが、見方でいろくな結論もできるし、そう白でなければ黒といったふうに手早く相場をつけるわけにもゆかないし、要するに複雑な知識があればあるほど面喰めんくらうようになります。

こんな例をお話するのはたゞ馬鹿らしいからお笑わらいぐせ草に御聞きに入れるまでのことだとお思いになるかもしれない。実はそうではない。こう批評してみるとなるほど子供は幼稚で気の毒なものだとししか取れません

が、その幼稚で気の毒のことを大人たる我々があえてしているのだからはなはだ情ない次第で、私は大人として子供はかくのごとくたわいないものだという証拠に自分の娘やなにかを例に引いたのではなく、かえって大人もまたこの例に洩れぬ迂愚なものであるということを証明したいと思つてちよつと分り易い小児を例に用いたのであります。すべて政治家なり文学者なりあるいは実業家なりを比較する場合に誰だれより誰のほうが偉いとか優まさっているとかいって、一概に上下の区別を立てようとするのは、たいていの場合においてその道に暗い素人しろうとのやることで

あります。専門の知識が豊かでよく事情が精しく分つて
いると、そう手短かに纏めた批評を頭の中に貯えて安心
する必要もなく、また批評をしようとするれば複雑な関係
が頭に明瞭めいりょうに出てくるからなか／＼「甲より乙が偉い」
という簡潔な形式によって判断が浮んでこないものであり
ます。幼稚な知識を有った者、没分ぼつぶん曉きょう漢かんあるいは門外
漢になると知らぬことを知らないで済すましているのが至当
であり、また本人もそのつもりで平気でいるのでしよう
が、どうも処世上の便宜からそう無頓着むとんじやくでいにくくなる
場合があるのと、一つは物数奇ものずきにせよ問題の要点だけは

胸に畳み込んでおくほうが心丈夫こころじようぶなので、とにかく最後の判断のみを要求したがりません。さてその最後の判断といえは善悪とか優劣とかそう範疇はんちゆうはたくさんないのですがむりにもこの尺度に合うようにどんな複雑なものでも委細かまいお構なく切り約めつぎられるものと仮定してかゝるのであります。中味は込入こみいっていて眼がちらくするだけだからせめて締括しめくった総勘定だけ知りたいというなら、まだ穏当な点もあるが、どんな動物を見ても要するにこれは牛かい馬かい牛馬一点張りですべて四つ足を品ひんに鷹しつされてはだいぶ無理ができる。門外漢というものはこ

の無理に気が付かない、また気が付いても構わない。どんな無理な判断でも与えてくれさえすれば安心する。だからお上かみでも高等官一等を拵こしらえてみたり、二等を拵えてみたり、あるいは学士・博士を拵えてみたりして門外漢に対して便宜を与え、一種の締括りある二字か三字の記号を本来の区別と心得て満足する連中に安慰を与えている。以上を一口にしていえば物の内容を知り尽した人間、中味の内に生息している人間はそれほど形式に拘泥こうでいしないし、また無理な形式を喜ばない傾かたむきがあるが、門外漢になると中味が分らなくつてもとにかく形式だけは

知りたがる、そうしてその形式がいかにその物を現あらわすに不適當であつてもなんでも構わずに一種の知識として尊重するということになるのであります。

これは複雑のことを簡略の例でお話をするのでありますから、そのつもりでお聴きを願いますが、こゝに一つの平面があつて、それに他の平面が交差しているとすると、この二つの平面の關係はなんで示すかということ、申すまでもなくその両面の喰違くいちがった角度である。どっちが高いのでもないどっちが低いのでもない。三十度の角度を為なしているとか、六十度の角度を為なしているとかい

ばきわめて明瞭でそれより以外に説明することも質問することもないのであります。それをこの二面がいつでも偶然平らに並行でもしているかのごとき了見^{りようけん}で、ぜんたいどつちが高いのですと聞かなければ承知ができないのは痛み入ります。人間と人間、事件と事件が衝突したり、捲^まき合ったり、ぐるぐ回^ま転したりする時その優劣上下が明^{あきら}かに分るような性質程度で、その成行^{なりゆき}が比較さえできれば宣^いいわけだが、惜しいかなこの比較をすするだけの材料、比較をすするだけの頭、纏めるだけの根気がないために、すなわち門外漢であるがために、ど

うしても角度を知ることができないために、上下とか優劣とか持ち合せの定規で間に合ませたくあわなるのは今申すとおりに門外漢の通弊でありますが、私の見るところでは絶対に独ひとり門外漢のみならんやで、専門の学者もまたそう威張いばれた義理でもないような概括をして平気でいるのだから驚かれるのです。

学者というものは、いろくの事実を集めて法則を作ったり概括を致いたします。あるいは何主義とか号してその主義を一纏ひとまとめに致します。これは科学にあつても哲学にあつても必要のことであり、また便宜なことで誰しもそ

れに異存のあるはずはございません。たとえば進化論とか、勢力保存とかいうとその言葉自身が必要であるばかりでなく、実際の事実のうえにおいて役に立っています。けれども悪くすると前申ぜんした子供や門外漢と同じように、内容にあまり合わない形式を拵えてたゞ表面上の纏りで満足していることが往々あるように思います。このあいだ私はある学者の書いた本を読みました。それはオイケンといって、近ごろドイツで、有名な学者の著わしたものであります。もっともたくさんの著述のうちでごく短かい一冊を読んだだけであります。とにかくその

人の説の中にこういうことが書いてありました。現代の人はしきりに自由とか開放とかいうようなことを主張する。同時に秩序とか組織とかいうものを要求している。一方では束縛を解いて自由にしてもらわなければ堪^{たま}らないといっているが、一方では（たとえば資本家というようなものが）秩序とか組織を立てなければ事業が発展しないと騒いでいる。が、この二つの要求を較^{くら}べると明かに矛盾である。——こゝまでは宜しいのです。しかしオイケンはこの矛盾はどっちかに片付^{かたづ}けなければならず、また片付けらるべきものであるかのごとき語気で論

じていたように記憶していますが——すなわちそういうように相反することを同時に唱えておつては矛盾だから、モツと一纏めにして、意味のある生活を人がやつてゆかなければならぬというようなことをいうのです。ですが貴方あなたがたはまあどうお考えになりますか。オイケンのいうとおりで宣いとお思いですか、はたしてこの矛盾が一纏めになるものとお思になりますか。また明かに矛盾しているというお考えでありますか。貴方がたにこんな質問を掛けたって詰まらない、また掛ける必要もありません。が私はどう考えてもオイケンの説は無理だと

思うのです。なぜ無理だといひますと、資本家とかあるいは政府とか、あるいは教育者とかいうものが、すべて多数の人間を相手にしてそうして、なにか事を手早く運び、手際よく片付けようというためには、どうしたって統一ということと、組織ということと、秩序ということとをまっこうに振翳ふりかざさなければできない話である。たとえば実業家が事業をする。そのために人夫を百人雇う。職工を千人雇う。そうして彼等の間に規律きりゆうというものがなかつたならば、——彼等のうちには今日は頭が痛いから休むというものもできようし、朝の七時から厭だから

己おれは午後から出ると我儘をいうものもできようし、あるいは今日は少し早く切り上げて寄席よせへ行くとか、あるいは今日は朝出掛でがけに酒を飲むんだとかおのくくかってなことを、ばらばらに行動されてはせつかく一ヶ月でできる事業も一年掛るか二年掛るか見込が立たなくなります。けれどももどうでしょうこういう軍人教育者実業家などが公務を仕舞しまって家へ帰ってさあこれから己おれの身体からだだという場合に、やはり同じような窮屈きわまる生活に甘んずるでしょうか。人によっては寝食の時間などたいへん規則正しい人もあるかもしれないが、原則からいえば楽に

自由な骨休めをしたいと願ひ、またできるだけその呑氣のんき
 主義しゆぎを實行するのが一般の習慣であります。すると彼等
 には明かに背馳はいちした両面の生活があることになる。業務
 に就ついた自分と業務を離れた自分とはどう見たつて矛盾
 である。しかしこの矛盾は生活の性質から出る已やむを得ざ
 る矛盾だから、形式からいへばいかにも矛盾のようであ
 るけれども、實際の内面生活からいへばかく二様になる
 ほうがかえつて本来の調和であつて、むりにそれを片付かたづ
 けようとするとするならばそれこそ眞の矛盾に陥るわけじやな
 かりうかと思ひます。なぜというと、一つは人を支配す

るための生活で、一つは自分の嗜慾しよくを満足させるための生活なのだから、意味がまったく違う。意味が違えば様子も違うのがもつともだといったような話であります。反対の例を挙あげて今度は同じことを逆に説明してみましよう。世間には芸術家という一種の職業がある。これはすこぶる気まぐれ商売で、共同的には決して仕事ができない性質のものであります。いくら八ヶ間敷やかましく小言をいわれても個人的にこつ／＼遺つてゆくのが原則になります。しかもその個人が気の向いた時でなければ決して働けない、また働かないというはなはだ我儘な自己本位

の家業になつてゐる。だから朝七時から十二時まで働かなければならないという秩序や組織や順序があつたところで、それだけ手際ての良い仕事よはできるものでない。すなわち自分の氣の向いた時にやったものがいちばん氣の乗つた製作となつて現われる。したがつて芸術家に対しては今申した資本家教育者などの執務ぶりや授業ぶりはあてはま当嵌あらない。がその個人的にでき上つた芸術家でも、彼等同業者の利益を団体として保護するためには、会なりクラブ俱樂部なり、組合なりを組織して、規則その他の束縛を受ける必要ができてくる。彼等のある者は今現にこれを

実行しつゝある。してみれば放縱ほうじゆう不羈ふきを生命とする芸術家ですらも時と場合には組織立った会を起し、秩序ある行動を取り、統一のある機関を備えるのである。私はこれを生活の両面に伴う調和と名づけて、決して矛盾の名を下したくない。矛盾には違ちがひなからうがそれは単に形式上の矛盾であつて内面の消息からいえばかえつて生活の融合なのである。

こゝに学者なるものがあつて、突然声を大にして、それは明かに矛盾である、どっちか一方が善くつて一方が悪いに極っている、あるいは一方が一方より小さくて一

方が大きいに違いないから、一纏めにしてモツと大きなもので括らなければならぬといつたならば、この学者は統一好きな学者の精神はあるにもかゝらず、実際には疎^{うと}い人といわなければならぬ。現にオイケンという人の著述を数多くは読んでおりませんが、私の読んだかぎりでいえば、こんな非難を加えることができるようにも思います。こう論じてくるとなんだか学者は無用の長物のようにもみえるでしょうが私は決してそんな過激の説を抱^{いだ}いているものではありません。学者はむろん有益のものであります。学者のやる統一、概括というものの

お蔭^{かげ}で我々は日常どのくらい便宜を得ているか分りませ
ん。まえに挙げた進化論という三字の言葉だけでもたい
へん重^{ちようほう}宝なものであります。しかしながら彼等学者に
はすべてを統一したいという念が強いために、でき得^うる
かぎりなんでもかでも統一しようとおせる結果、また学
者の常態として冷然たる傍観者の地位に立つ場合が多い
ため、たゞ形式だけの統一で中味の統一にもなんにもな
らない纏め方をして得意になることも少くないのは争
うべからざる事実であると私は断言したいのです。

冷然たる傍観者の態度がなぜにこの弊を醸^{かも}すかとの御

質問があるなら私はこう説明したい。ちよつと考えると、
 彼等は常人よりはつきりした頭を有つて、普通の者より
 根氣強く、しつかり考えるのだから彼等の纏めたものに
 間違まちがひはないはずだと、こういうことになります。彼等
 は彼等の取扱とりあつかう材料から一步退いて佇立たゞずむ癖がある。
 いい換えれば研究の対象をどこまでも自分から離して眼
 の前に置こうとする。徹頭徹尾観察者である。観察者で
 ある以上は相手と同化することはほとんど望めない。相
 手を研究し相手を知るといふのは離れて知るの意でその
 ものになりすましてこれを体得するのとはまったく趣が

違う。いくら科学者が綿密に自然を研究したって、必竟ひつきよう
 ずるに自然は元もとの自然で自分も元の自分で、決して自分
 が自然に変化する時期が来ないごとく、哲学者の研究も
 また永久局外者としての研究で当の相手たる人間の性情
 に共通の脈を打たしていない場合が多い。学校の倫理の
 先生がいくら偉いことを言ったって、つまり生徒は生徒、
 自分は自分と離れているから生徒の動作だけを形式的に
 研究することはできても、事実生徒になって考えること
 は覚束おぼつかないのと一般である。傍観者おほかめというものは岡目
 八目はちもくともいい、当局者は迷うという諺ことわざさえあるくらい

だから、冷静に構える便宜があつて観察する事物がよく分る地位には違ありませんが、その分り方は要するに自分のことが自分に分るのとは大いに趣を異にしている。こういう分り方で纏め上げたものは器械的に流れ易いのは当然でありましょう。換言すれば形式のうえではよく纏まるけれども、中味からいうといつこう纏っていないかというような場合が出てくるのであります。がつまり外からして観察をして相手を離れてその形を極めるだけ内部へ入り込んでその裏面の活動からしておのずから出る形式を捉え得ないということになるのです。

これに反してみずから活動しているものはその活動の形式が明かに自分の頭に纏って出てこないかもしれない代りに、観察者の態度を維持しがちの学者のように表面上の矛盾などをむりに纏めようとする弊害には陥る憂うれいがない。先ほどオイケンの批評をやって形式上の矛盾を中味の矛盾と取り違えてぜひ纏めようとするは迂濶うかつだといつて非難しましたが、あの例にしてからが、もしオイケン自身がこの矛盾のごとく見える生活の両面を親しく体現して、一方では秩序を重んじ一方では開放の必要を同時に感じていたならば、たとい形式上こういう結論に

到着したところで、どうも変だどこかに手落ておちがあるはずだとまずみずから疑いを起して内省もし得たろうと思うのです。いくら哲学的でも、概括的でも、自分の生活に親しみのない以上は、この概括をあえてすると同時にハテ可笑おかしいぞ変だなと勘づかなければなりません。勘づいて内省の結果だんだん分解の歩を進めてみると、なるほど形式のほうにはそれだけの手落があり、抜目ぬけめがあるということが判然してくるべきです。だからして中味を持っているものすなわち実生活の経験を嘗なめているものはその実生活がいかなる形式になるかよく考える暇さえ

ないかもしれないけれども、内容だけはたしかに体得しているし、また外形を纏める人は、まことに綺麗きれに手際よく纏めるかもしれないけれども、どこかに手落がありがちである。ちようど文法というものを中学の生徒などが習いますが、文法を習ったからといってそれがため会話じようずが上手にはなれず、文法は不得意でも話は達者たっしやにもやれる通弁などいうものもあって、そのほうが實際役に立つと同じことです。同じような例ですが歌を作る規則を知っているから、和歌が上手だといったら可笑しいでしょう、上手の作った歌がそのうちにしぜんと歌の規則を含む

んでいるのでしよう。文法家に名文家なく、歌の規則などを研究する人に歌人が乏しいとはよく人のいうところですが、もしそうするとせつかく拵こしらえた文法に妙に融通の利きかない杓子定規しやくしじょうぎのところができたり、また苦心して纏めた歌の法則も時には好い歌を殺す道具になるように、実地の生活の波濤はとうをもぐってこない学者の概括は中味の性質に頓着なくたゞ形式的に纏めたような弱点が出てくるのも已むを得ないわけであります。なおこの理を適切に申しますと、いくら形というものがはつきり頭に分っておっても、どれほどこうならなければならぬとい

う確信があつても、単に形式のうえでのみ纏っているだけで、事実それを実現してみないときには、いつでも不安心のものであります。それは貴方がたの御経験でも分りました。四五年前日露戦争というものがありました。ロシアと日本とどっちが勝つかというずいぶんな大戦争でありました。日本の国是はつまり開戦説で、とうとうあのロシアと戦たゝかひをして勝ちましたが、あの戦を開いたのは決して無謀にやったものではありません。必ず相当の論拠があり、研究もあつて、ロシアの兵隊が何万満洲へ繰くり出だすうちには、日本ではこれだけ繰出せるとか、あ

るいは大砲は何門あるとか、兵糧はどのくらいあるとか、軍資はどのくらいであるとかたいていの見込は立てたものでありましよう。見込が立たなければ戦争などはできるはずのものではありません。がその戦争をやるまえ、やる間際、およびやりつゝあるあいだ、どのくらい心配をしたか分らない。というのはいかに見込のちやんと明かに立ったものにせよたゞ形式のうえで纏っただけでは不安で堪らないのであります。当初の計画どおりを実行してそうして旨く見込に違わない成績を振り返ってみて、なるほどとはじめて合点して納得のいったような顔

をするのは、いくら綺麗に形だけが纏っていても実際の経験がそれを証拠立ててくれない以上は大いに心細いのであります。つまり外形というものはそれほど強味つよみがないということに帰着するのです。近ごろ流行はやる飛行機でもそのとおりで、いろいろ学理的に考えた結果、こういうふうに羽翼を付けて、こういうように飛ばせば飛べぬはずはないと見込がついたうえで、雛形ひながたを拵えて飛ばしてみればはたして飛ぶ。飛ぶことは飛ぶので一応安心はするようなもののそれに自分が乗っていざという時飛べるかどうかとなると飛んでみないうちはやっぱり不

安心だろうと思います。学理どおり飛行機が自分を乗せて動いてくれたところで、はじめて形式に中味がピツタリ喰^{くっ}付^っいていることを証明するのだから、経験の裏書を
得ない形式はいくら頭の中で完備していると認められても不完全な感じを与えるのであります。

して見ると、要するに形式は内容のための形式であつて、形式のために内容ができるのではないというわけになる。もう一歩進めていいますと、内容が変れば外形と
いうものは自然の勢いで変つてこなければならぬという
理窟にもなる。傍観者の態度に甘んずる学者の局外の観

察から成る規則法則ないしすべての形式や型のために我々生活の内容が構造されると少しく筋が逆になるので、我々の實際生活がむしろ彼等学者（時によれば法律家といつても政治家といつても教育家といつても構いません。とにかく学者的態度で観察一方から形式を整える方面の人を指す^さのです）に向つて研究の材料を与えその結果として一種の形式を彼等が抽象することができ^るのです。その形式が未来の実施上参考にならんとは限らんけれども本来からいえばどうしてもこれが原則でなければならぬ。しかるに今この順序主客を逆^{さかさ}まにし

てあらかじめ一種の形式を事実よりまえに備えておいて、その形式から我々の生活を割出わりだそうとするならば、ある場合にはそこにたいへんな無理が出なければならぬ。しかもその無理を遂行しようとするれば、学校なら騒動が起る、一国では革命が起る。政治にせよ教育にせよあるいは会社にせよ、わが朝日社のごとき新聞にあつてすらそうである。だから世間でもそう規則づくめにされちや堪らないとよくいいます。規則や形式が悪いのじやない。その規則を当嵌あてはめられる人間の内面生活はしぜんに一つの規則を布衍ふえんしていることは前申ぜんし上げた説明で

すでに明かな事実なのだから、その内面生活と根本義に
おいて^{ていしよく}牴触しない規則を抽象して^{ひようぼう}標榜しなくては長持^{ながもち}
がしない。いたずらに外部から観察して綺麗に纏め上げ
た規則をさし突^つけてこれは学者の拵えたものだから間違
はないと思っ^まてはかえって間違になるのです。

お前^{まえ}のいうとおりになると、たいへん可笑しいことが
ある。たとえば芝居の型だ。また音楽の型ともい
うべき譜である。または謡曲のごま節やなにかのような
ものである。これ等にはすべて一定の型があつて、その
形式をまず手本にしてかえつて形式の内容をかたちづく

る声とか身振みぶりとかいうほうをこの型にあて嵌はまるように拵らえてゆくではないか。そうしてその声なり身振なりがしぜんと安らかに毫も不満を感ぜずに示された型どおり旨く合うように練習の結果としてできるではないか。あるいは旧派の芝居を見ても、能の仕草しぐさを見ても、こゝで足をこのくらい前へ出すとか、また手をこのくらい上へ挙げると一一型のとおりにして、しかも自分の活力をそこに打込うちこんで少しも困らないではないか。型を手本に与えておいてそのなかに精神を打ち込んで働けない法はない。とこういう人があるかもしれぬ。けれどもこ

う場合にはこの型なり形式なりの盛らるべき実質、すなわち音楽でいえば声、芝居でいえば手足などだが、これ等の実質はいつも一樣に働き得る、いわば変化のないものと見ての話であります。もし形式のなかに盛らるべき内容の性質に変化を来すならば、昔の型が今日の型として行わるべきはずのものではない、昔の譜が今日に通用してゆくはずはないのであります。たとえば人間の声が鳥の声に変化したらどうしたって今日までの音楽の譜は通用しない。四肢胸腰の運動だっても人間の体質や構造に今までとは違ったところができて筋肉の働き方

が一筋間違つてきたつて、従来の能の型などは崩れなければならぬでしょう。人間の思想やその思想に伴つて推移する感情も石や土と同じように、古今永久変らないものと看做したなら一定不変の型の中に押し込めて教育することでもできるし支配することも容易でしょう。現に封建時代の平民というものが、どのくらい長いあいだ一種の型のなかに窮屈に身を縮めて、辛抱しつゝ、これは自分の天性に合った型だと認めておつたかしれません。フランスの革命の時に、バステユという牢屋を打壊して中から罪人を引出してやったら、喜こぶと思いのほか、か

えって日の目を見るのを恐れて、依然として暗い中には
いつていたがったという話があります。ちよつと可笑し
な話であるが、日本でも乞食を三日すれば忘れられない
といえますからあるいはほんとうかもしれません。乞食
の型とか牢屋の型とかいうのも妙な言葉ですが、長い年
月のあいだには人間本来の傾向もそういうふうたに矯める
ことができないともかぎりません。こんな例ばかり見れ
ば既成の型でどこまでも押しつけてゆけるといふ結論にもな
りましょうが、それならなぜ徳川氏が亡ほろびて、維新の革
命がどうして起ったか。つまり一つの型を永久に持続す

ることを中味のほうで拒むからなんでしょう。なるほど
一時は在来の型で抑え^{おさ}られるかもしれないが、どうした
って内容に伴^っれ添わ^ない形式はいつか爆発しなければな
らぬと見るのが穏当で合理的な見解であると思う。

元来この型そのものが、なんのために存在の権利を持
っているかという^と、まえにもお話したとおり内容実質
を内面の生活上経験することができないにもかゝわらず
どうでも纏めて一括^{ひとく}りにしておきたいという念にほかな
ら^んので、会社の決算とか学校の点数と同じように表の
う^えで早吞込^{はやのみこみ}をする一種の知識欲、もしくは実際上の便

宜のためにほかならるのでありますから、厳密な意味でいうと、型自身が独立して自然に存在するわけのものではない。たとえばこゝに茶碗ちやわんがある。茶碗の恰好かっこうといえど誰にでも分るが、その恰好だけを残して実質を取り去ろうとすれば、とうてい取り去ることはできない。実質を取れば形もなくなってしまう。しいて形を存しようとするればたゞ想像的な抽象物として頭の中に残っているだけである。ちようど家を造るために凶面を引くと一般で、八畳・十畳・床の間というように仕切くぎりはついても凶面はどこまでも凶面で、家としては存在できないに極つ

ている。要するに図面は家の形式なのである。したがっていくら形式を拵えてもそれを構成する物質次第では思いのまゝの家はできかぬるかもしれないのです。いわんや活きた人間、変化のある人間というものは、そう一定不変の型で支配されるはずがない。政まつりごとを為す人とか、教育をする人とかはむろん、すべて多くの人を統御してゆこうという人もむろん、個人が個人と交渉する場合にあつてすら型は必要なものである。会う時にお時儀じぎよをするとか手を握るとかいう型がなければ、社交は成立しないことさえある。けれども相手が物質でない以上は、す

なわち動くものである以上は、種々の変化を受ける以上は、時と場合に応じて無理のない型を拵えてやらなければどうていこつちの要求どおりに運ぶわけのものではない。

そこで現今日本の社会状態というものはどうかと考えるしてみると目下非常な勢いで変化しつゝある。それにつれて我々の内面生活というものもまた、刻々と非常な勢いで変りつゝある。瞬時の休息なく運転しつゝ進んでいる。だから今日の社会状態と、二十年前、三十年前の社会状態とは、たいへん趣おもむきが違っている。違っているから

して、我々の内面生活も違っている。すでに内面生活が違っているとすれば、それを統一する形式というものも、自然ズレてこなければならぬ。もしその形式をズラさないで、元もとのまゝに据すえておいて、そうしてどこまでもそのなかに我々のこの変化しつゝある生活の内容を押し込おしこめようとするならば失敗するのは目に見えている。我々が自分の娘もしくは妻に対する関係のうえにおいて御維新前と今日とはどのくらい違うかということ、貴方がたがお認めになったならば、この辺の消息はすぐお分りになるでしょう。要するにかくのごとき社会を総すべる形

式というものはどうしても変えなければ社会が動いてゆかない。乱れる、纏まらないということに帰着するだろうと思う。自分の妻女めづめに対してさえも前ぜん申したとおりである。いなわが家やの下女げにやに対しても昔とは趣きが違うならば、教育者が一般の学生に向い、政府が一般の人民に對するのもむろん手心がなければならぬはずである。内容の変化に注意もなく頓着もなく、一定不変の型を立てて、そうしてその型はただ在来あるからという意味で、またその型を自分が好んでいるというだけで、そうして傍觀者たる学者のような態度をもって、相手の生活の内

容に自分が触れることなしに推おしていったならば危あぶない。

一言にしていえば、明治に適切な型というものは、明治の社会的状況、もう少し進んでいうならば、明治の社会的状況を形造る貴方がたの心理状態、それにピッタリと合うような、無理の最も少ない型でなければならぬのです。このごろは個人主義がどうか、自然派の小説がどうかあるとかいって、はなはだやかましいけれども、こういう現象が出てくるのは、皆我々の生活の内容が昔としぜん違ってきたという証拠であって、在来

の型とある意味でどこかしらで衝突するために、昔の型を守ろうという人は、それを押潰おしつぶそうとするし、生活の内容によって自分自身の型を造ろうという人は、それに反抗するというような場合がたいへんありはしないかと思うのです。ちょうど音楽の譜で、声を譜の中に押込おしこめて、声自身がいかに自由に発現しても、その型に背そむかないで行雲流水と同じくきわめて自然に流れると一般に、我々も一種の型を社会に与えて、その型を社会の人のつとに則らしめて、無理がなくゆくものか、あるいはこゝで大いに考えなければならぬものかということとは、貴方がたの

問題でもあり、また一般の人の問題でもあるし、最も多く人を教育する人、最も多く人を支配する人の問題でもある。我々は現に社会の一人である以上、親ともなり子ともなり、ほうゆう朋友ともなり、同時に市民であつて、政府からも支配され、教育も受けまたある意味では教育もしなければならぬ身体である。その辺のことをよく考えて、そうして相手の心理状態と自分とピッタリと合せるようにして、傍観者でなく、若い人などの心持にも立入たちいって、その人に適当であり、また自分にももつともだちというよきな形式を与えて教育をし、また支配してゆかなければ

ならぬ時節ではないかと思われるし、また受身のほうからいえばかくのごとき新らしい形式で取扱われなければ一種いうべからざる苦痛を感ずるだろうと考えるのです。

中味と形式ということについて、なぜお話をしたかというのと、以上のような訳でこの問題について我々が考うべき必要があるように思ったからであります。それを具體的にどう現わして宣いかということとは、諸君の御判断であります。下らぬことを^{くだ}だいぶ長く述べ立ててお気の毒です。だいぶお疲れでしょう。最後まで静肅にお

聴きくだすったのは講演者として深く謝するところであり
ます。(明治四十四年八月堺において述)

(明治四四・一一・一〇『朝日講演集』)

日本文学電子図書館

中味と形式

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 9 卷」角川書店
昭和42年10月10日 6版発行

日本文学電子図書館